

僧と財とのあわい―無住の著作を手がかりとして―

高橋 秀城

はじめに

夫 僂言軟語ミナ第一義ニ帰シ、治生産業シカシナガラ実相ニ背ズ。然レバ狂言綺語ノアダナルタハブレヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道ニ入シメ、世間浅近ノ賤キ事ヲ譬トシテ、勝義ノ深キ理ヲ知シメント思フ。¹⁾

『沙石集』の冒頭において無住(一二二六―一二二二)は、僂言も軟語も究極の真理に帰結し、生きるための生活の生業も悉く真実の姿に背かないことを示す。狂言綺語の戯れを縁として仏乗に入り、俗世間の賤劣な事柄を喩えとしながら究極の真理の深き道理を説き明かそうとしており、和歌や物語が仏道修行の助縁にも成り得るといふ狂言綺語観を見ることができるといえる。

ところで、この冒頭で無住が抛り所とした「治生産業シカシナガラ実相ニ背ズ」とは、具体的にどのような事柄を指しているのだろうか。「治生産業」と「実相」とが、そのまま「即」で繋がれる以前に、狂言綺語観における「縁」のような何かが生かしているのではないか。

僧侶にとつての「治生産業」には、日々の衣食を得るために乞食をしながら諸国を巡り歩くことや、寺院や堂塔の創建に当たつて金品を得るための勧進などの行為も含まれよう。僧侶にとつて俗世の物資や金銭を獲得することが、仏道修行や究極の真理とどこで結ばれているのか。本稿では、「僧」と「財」とのあわいに注目し、特に無住の著作を中心としながら検討を加えてみたい。²⁾

一

無住の著作を見る前に、まず僧侶にとつての「財」に対する意識を探つてみたい。幼童の教訓書である『実語教』は、次の一節で始まつている（訓読・傍線、筆者。以下、同じ）。

山高故不貴。以有樹為貴。（山高きが故に貴からず、樹あるを以て貴しと為す。）

人肥故不貴。以有智為貴。（人肥えたるが故に貴からず、智有るを以て貴しと為す。）

富是一生財。身滅即共滅。（富は是一生の財、身滅すれば即ち共に滅す。）

智是萬代財。命終即隨行。（智は是萬代の財、命終はれば即ち随つて行く。）³⁾

高く聳える山々は美しく、生活の豊かな人間は立派に見える。しかしそれは一面的であつて、その山に神聖な樹木が生い茂り、人間に豊かな智慧が備わつていてこそ、真に崇め重んずべき存在となる。物事の価値を、程度によつてのみ理解するのではなく、本質を熟視することの重要性を説き明かす。さらに「富」（財宝）は身体とともに滅び行くのに対し、「智」（智慧）は命終の後も随い行くと続く。今生における「富」とは、例えば、『大集経』の偈頌に「妻子珍寶及王位 臨命終時無隨者 唯戒及施不放逸 今世後世為伴侶」⁴⁾とあるように、妻子や珍しい宝、

王位など、現世で価値があるとされる「財」を指すだろう。『大集経』では「戒律」と「布施」を伴侶とすべきことを説くが、『実語教』では「財」という言葉を「一生の財」と「萬代の財」とに区別し、物質的なもの（財宝・肉体）の奥に備わる本質（智慧・心）を蓄えることの大切さを論じている。

『実語教』にはその他の箇所にも、「倉内財有朽。身内才無朽。」（倉の内の財は朽つること有り。身の内の才は朽つること無し。）、「財物永不存。才智為財物。」（財物永く存せず。才智を財物と為す。）、「雖入富貴家。為無財人者。猶如霜下花。雖出貧賤門。為有智人者。宛如泥中蓮。」（富貴の家に入るといへども、財無き人と為らば、なほ霜下の花のごとく、貧賤の門より出づといへども、智有る人と為らば、あたかも泥中の蓮のごとし。）と見える。外面の「財宝」と内面の「才智」とを比べ合わせながら、繰り返して学問習得の重要性を示している。

こうした教訓は、『実語教』と同様に幼童誘引の性格を持つ『童子教』においても、

綾羅錦繡者。全非冥途貯。（綾羅錦繡は、全く冥途の貯へに非ず。）

黄金珠玉者。只一世財宝。（黄金珠玉は、只一世の財宝。）

栄花栄耀者。更非仏道資。（栄花栄耀は、更に仏道の資（たす）けに非ず。）⁵⁾

とあるように、金銀財宝は今生でのみの蓄えであり、名声地位は仏道の資けとならないことが語られ、さらには後半では、

布施菩提粮。人最不惜財。（布施は菩提の粮、人最も財を惜しまざれ。）

财宝菩提障。若人貧窮身。（财宝は菩提の障り、若し人貧窮の身にて、）

可布施無財。见他布施時。（布施すべき財無く、他の布施を見る時、）

可生随喜心。（随喜の心を生ずべし。）

として、財宝は煩惱を断ち切り悟るための妨げとなるものであって、惜しむことなく布施を行うことが説かれる。

この『実語教』『童子教』は、それぞれ弘法大師空海（七七四〜八三五）、五大院安然（八四一〜八八九）の作に仮託されるが定かではない。『実語教』は平安時代末期には成立し、長門本や延慶本『平家物語』、無住『雑談集』等に引かれていることから、鎌倉時代には流布していたと言われ、江戸時代からは寺子屋の教科書として使用されるなど、子供たちの教育に重要な役割を果たしてきた。

こうした状況は寺院内での僧侶教育においても同様であり、室町時代末期の史料には、真言僧侶が必ず学ぶべき典籍として以下の典籍が挙げられている。

心経 錫杖 観音経 寿量品 提婆品 阿弥陀経 舍利礼 実語教 童子教 朗詠上下 論語十卷 孝経
 琵琶引 長恨歌 大学 庭訓 御式條 釈氏往来 秘鍵 即身義 菩提心論 声字義 卍字義
 三教指帰^{三卷} 宝鑰^{三卷} 要文^{三帖} 二教論^{上下} 字記^{一卷} 付法伝^{二卷} 金剛頂開題 新札 遊覚
 十二月往来 新猿栗記

（東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』⁶）

ここには、「幼童令読分」として真言僧侶が出家以前の十五歳の春までに学ぶべき典籍として、『般若心経』などの經典類や、『論語』などの中国典籍、『庭訓往来』などの往来物、『般若心経秘鍵』といった空海の著作などとともに『実語教』『童子教』が挙げられている。法要において頻繁に用いられる經典や、真言教学必読の書が列挙されていることから、幼童たちはこれらの典籍を暗誦していたことだろう。『実語教』『童子教』の教えも僧侶の基礎知識として日々学んでいたことが推察される。

さて、『実語教』に言う「一生の財」と「萬代の財」は、そのまま「世財」と「聖財」とに置き換えることができる。物質としての財宝は現世のみの仮初めの所有物であり、日々の修学によって得られた才智は来世につながる真の宝

となる。本稿では「財」に着目しているが、これはもちろん現世における無常や因果の理によって裏打ちされている。煩惱・欲望を生ずる「世財」は「布施」によって喜捨し、来世の悟りに向かつて「聖財」を友とすることが求められているのである。

二

八宗兼学の僧侶として知られる無住には、『沙石集』『雑談集』『聖財集』などの著作が残されている。無住の「財」に注目すれば、『聖財集』において「信」「戒」「慚」「愧」「多聞」「智恵」「捨離」の七聖財を論じ、また『雑談集』には、前節で見た『実語教』も引かれていることから、無住の「財」意識には『実語教』『童子教』に見られたような教えが根底に流れていることが想像されよう。

さらに『雑談集』において、自らの生涯を次のように語っている点は注目される。

・愚老貧家ノ因縁、自然ニ入^ニリ遁世門^ニ及^ニテ五十年^ニ。如説修行、有^ルモ志無^シ力。見性悟道、亦其ノ分空シト云ヘドモ、久大乘ノ聖教ヲ翫デ法門ノ愛樂隔生ニモ不^ル可^レ忘^ルル歟。^{〇七}

(卷三)

・只世間無沙汰ニシテ、貧ナル因縁、自然ニ遁世ノ媒タルニヤ。遁世ノ門ニ入テ、随分律ヲ学ビ、又止観等学シキ。

(卷五)

自らの出家原因を、「貧家」「貧」なるが故の、生きるための所業としている。貧しいことを「因縁」「媒」として出家し、戒律と智恵の志によって今まで仏道を修めてきたことを述懐している。

こうした境遇の無住にとつて、「一生の財(世財)」と「萬代の財(聖財)」とは如何に理解されていたのであろうか。

例えば『沙石集』と『妻鏡』を比較してみるならば、『沙石集』には「財(ざい・たから)」（二十二例）、「財宝」（七例）、「家財」（五例）、「資財」 「聖財」 「財色」（各三例）、「世財」（二例）、「財利」 「財産」 「財物」（各一例）というように「財」が四十八箇所を表れ、『妻鏡』では「財宝」（十一例）、「財」（四例）とあつて十五箇所に表示している。両書には分量の差こそあるものの、『沙石集』には「財」という言葉の多様性が見られるのに対して、『妻鏡』は「財宝」そのものに焦点を当てて論じているように見受けられる。

『妻鏡』の「財」に着目するならば、

此の身の為に、生ある物の命を断て舌に味ひ、猥しく財宝を貪て衣食の計とす。夫財宝は甘毒に似たり。彼に酔て仏道を不修行。現世の甘露は、後生の鉄丸と成と云へり。愚哉、一旦の仮の身を養はんが為に、曠劫多生の身心を亡さんとすること⁸⁾を。

とあるように、世財は来世の鉄丸であつて、今生における財宝に飢渴することの愚かさを述べている。また別の箇所では、「財宝を蓄心をば積聚心と云て、是も同く輪廻の業を引大罪也。」として、財宝を貪る心は『大日経』に説く「積聚心」の煩惱、輪廻の業となる大罪となるとも語る。『妻鏡』に見られる「財宝」のほとんどは、今生での財宝（一生の財）として用いられており、世財に執着することの愚かさから脱し、仏道を希求することの大切さを説き示している。

こうした『妻鏡』の「財」の用例の中で、次の一文は特に注目されよう。

智者の財宝と者、本より諸法に自性無故に、深く貪著する心無けれども、無縁の者を羽含み、仏法を興業し、生身を助け、仏身を祈んが為に、仮りに財宝を貯たるは、愚人のをろかなる眼には在家に等しけれども、智者の賢き心には化他利益と成て、一切皆仏事に非る事なし。或は制し或は免ぬ。皆是れ大聖の方便也。凡そ賢

愚の境、能々可存知者也。

無住が語るには、同じ財宝であっても「智者の財宝」というものがあると言う。それは、1、無縁の衆生を慈しみ、2、仏法を興業し、3、生身の身体を助け、4、仏を祈るために仮に財宝を蓄えることだとする。これは「智者の賢き心」によってこそ、全ての物事が「仏事」（教化）となる「大聖の方便」となるのであって、同じ行為であっても「愚かな心」のままであれば、後生への大罪となってしまうことを意味しているのである。才智ある者が仏法興隆のために集めた財宝は「聖財」となり、財宝のみに執着する者にとつては「世財」となる。物質としての「財」は、取り扱う者の智慧の有無によって、甘毒ともなり妙薬ともなり得るのである。

三

僧侶は「聖財」を友としながらも、やはり仏道修行を行うためには、その基となる僧衣や食べ物、住居などの資縁（布施）が必要となってくる。「布施」には、僧侶から貧困者への施しや、世俗の人々から寺院・僧侶への寄進など物資を与える「財施」、僧侶が民衆に教えを説き示す「法施」、そして人々の怖れを取り除く「無畏施」の（三施）が説かれているが、例えば三宝（仏・法・僧）への布施に着目するならば、僧の修行に必要な最低限の衣食住の他、仏に捧げる硯や念珠などの身近な物⁹、貴族から寺院への荘園の寄進や財貨などの寄付なども含まれてこよう。法要に対する布施（財施）もあり、僧侶は説法（法施）を行うことによって、民衆の苦しみを取り去ること（無畏施）が求められている。

ところが『沙石集』には、説法も満足に行わずに布施のみを持ち去るといふ僧侶の話が見える。例えば巻六「説

法セズシテ布施取タル事」には、

△鎌倉ニ或尼公、逆修シケリ。説経ナムドモセヌ僧ナレドモ、モシ希望ノ心モアリ、色代ニ請用セヨトテ、「一座ノ供養シ給ナンヤ」ト、イハセケレバ、布施ノホシサニヤ、無左右領状シテケリ。

として、普段から説教をしないにもかかわらず、布施の欲しさに法要を承諾し、結局一言も説法をすることなく布施だけを奪い取っていく僧侶や、

或説経師、俄ニ風吹テ、折紙ヲ柚木ノ梢ニ吹アゲテケレバ、不及力。取ニ不能シテ、「委事ハ、柚木ノスヘニ候」トテ、ヨリタリケルニ、猶ヲトリテ、一句モ不申シテ布施取リケル心、人ナラズコソ覺レ。

のように、自ら説教師と称しながらも、風に吹かれて梢に舞い上がった折り紙（手控え）を気にもとめず、やはり一句も発することなく布施だけを取り上げる僧侶などが登場する。『沙石集』のテーマの一つとして「信施」の問題が挙げられているが、³¹⁰信者の布施に対して、説法（法施）を行うことなく、施物（財施）のみを受け取っていくという誑惑・信施無慚の僧の姿が語られているのである。

さて、こうした「世財」に執着する僧侶について、『沙石集』巻六「有所得説法事」では、以下のように語られている。邪命説法ト云名目ハ、仏藏經ニ出タリ。有所得トモイヘリ。同事也。世間ノ人ハ、有所得ト云ハ、布施ヲ望テスル説法ト思ヘリ。然ニ經ノ中ニハ、諸法実相ヲ不知シテ、有為ノ法ヲ説テ、無相ノ理ヲ不説ハ、邪命ノ説法也。無所得ノ道理ヲ不説故ニ、有所得ト云ヘリ。斯ル説法ハ、三千大千世界ノ人ノ眼ヲクジ（ル）ヨリモ罪也。又日夜二十悪ヲ造ル物ヨリモ重キ罪也。十悪ヲ造ル者ヲバ、人コレヲ師トセズ。其身共隨ト云ヘドモ、人ヲ引テヲトス事ナシ。有所得ノ説法ハ、人ヲシテ生死ノ業ヲマシ、実相ノ理ニトヲザカラ（シ）ムト云ヘリ。マシテ布施ノ希望ハ名利ノ為ナリ。云ニタラズ。

自らの生活のために説法をし、諸法実相の理を知ることなく、説法の際に現象界の有為法ばかりを話し、無為の涅槃の境地を説かないことを邪命説法（有所得説法）と言うのであつて、ましてや財宝や名誉を求めての説法など、言うまでもなく重い罪となることを説いている。

このように見るならば、先に見た信施無慚の僧などは、論ずるまでもなく大罪を犯していることになるだろう。僧侶であるにもかかわらず内面には智慧なく、むしろ「一生の財」に執着している。『雑談集』に、

又愚人の云く、智者と云ども腹を立て財を貪ぼる心あり。寒き時は衣を求め、飢たる時は食を願ふ。貪欲の心、在家の愚人に少しも替り目無しと云へり。

とあるように、見た目は僧侶（智者）のような姿をしていても、腹を立てることもあれば、世財（一生の財）を欲しがる心を持つている。衣食などを貪る心は、愚人と少しも変わるところがないのではないかと。この愚人の問いに対して、「智者」について次のように語る。

然るに智者に二つの品あり。一には本より無道心の者の名聞利養を宗として、今生二期栄ん為在家愚痴の族を誑惑し、財宝を貪らんが為に仏法を習、要文を誦連て智者の名を施し、不浄説法を能として布施を望み、世を諛ひ、自ら福報を祈て、難行苦行して本尊に祈請し、阿練若に独住して賢善聖人の相を示せ共、内穢虚仮不真実の行、本性大欲心に、同故に、腹を立て、財を貪る心、在家の愚人よりも愚かなりとす。清淨の仏法を垢し、世俗の不浄と成すが故に、愚人よりも過たり。二には本性柔軟にして慈悲も深く、道念もある族、生死の一大事を歎き、仏道に進み、知識を訪ひ、仏教に隨順し、仏の制戒を守が故に、自ら損し他を損し、今生を損し後世を損る事、不可有。知識百化とて、智者の瞋恚は極悪の族心を恚にして、煩惱の催に隨ひ、魔縁の勤めに任て、業の上に業を重ね、悪の上に悪を加ふる事を悲で、彼を對治せんが為に方便して誠を加ふる也。

仏も降伏の相とて、明王部乃至外部の天等の甲冑を鎧ひ、弓箭を帯して、瞋恚の相を現し給へる是也。

無住によれば、「智者」（僧侶）には二種類の品があると言う。一つは財宝を貪るために仏法を習い、要文を誦して不浄説法を行い布施を望む者。これは世俗の汚れを恥じることもなく「在家の愚人よりも愚か」であると言う。それに対してもう一つは、慈悲心・求道心を持ち、現世の無常を嘆き、仏道に励んで智慧を磨き、戒律を保つ者。煩惱の魔を滅するために、方便として怒りの相を表している智者だと言う。

先の財施に執着する信施無慚の僧などは、まさに前者の智者（皮肉を込めて）となるだろう。俗世間を捨てて出家し、衣をまよえば僧侶となるが、よくよく見ると「俗世間の僧侶」と「出世間の僧侶」とが混在している。これは先に見た『実語教』において、「財」に「一生の財」（世財）と「萬代の財」（聖財）があることと共通していると言えよう。『実語教』冒頭の「山」の比喻のように、僧侶の姿であるだけで崇められることもあるだろう。しかし大事なことは形ではなく内面（心）を見つめることであり、それぞれの僧侶の智慧の有る無しによって、智者であるか愚人であるかが分かれているのである。

おわりに

幼童の頃から「財宝」よりも「才智」の重要性を説くのは、それだけこの世の財宝が甘毒であり、功罪があることに他ならない。僧侶にとつても「財」は必ずしも悪しきものではなく、仏者としての智慧を備えていれば妙薬ともなる。本稿では、無住の著作を中心に、「僧」と「財」との結びつきについて考察してきたが、俗世間の財（一生の財）のみに執着する僧侶と、仏法興隆のために方便として財（萬代の財）を求める僧侶とは大きな隔たりが

あり、同じ財施であっても「世財」と「聖財」とに分かれることが確認された。¹¹⁾

仮に、民衆から僧侶に財が施された時、その僧侶が俗世間にまみれ、仏と結ばれていなかったならば、せつかくの淨財も世財へと変容してしまう。内面において仏の世界に住している時、僧侶の説法が真の言葉となり、ここに「法施」（説法・説教・唱導）と「財施」（衣服・飲食・田宅・珍宝）の相互関係による「無畏施」が生じるのではないだろうか。僧侶の心の置き所が重要なのであり、中身のない外面だけの説法であつては、当然のことながらそこに無畏施は存在しないのである。

また本稿では「財」に着目したが、こうした内面の心の置き所への問いかけは、冒頭の狂言綺語観とも密接に繋がっていると言えよう。『沙石集』巻五「哀傷歌ノ事」に、

和歌ヲ綺語ト云ヘル事ハ、ヨシナキ色フシニヨセテ、ムナシキヲ思ツゞケ、或ハ染ノ心ニヨリテ、思ワヌ事ヲ思ツゞケ、或ハ染ノ心ニヨリテ、思ワヌ事ヲモ云ヘルハ、實ニトガタルベシ。離別哀傷ノ思切ナルニツキテ、心ノ中ノ思ヲ、アリノマ、ニ云ノベテ、萬縁ヲワスレテ、此事ニ心スミ、思シズカナレバ、道ニ入ル方便ナルベシ。

とあり、俗世間の妄執にとらわれた心でのみ詠じた和歌は空虚なものとなるが、無常なる自然の移ろいを観じながら、因果の理を超えて詠じた和歌は仏道に入る方便となることが説かれる。「財」に見る「世財」と「聖財」のように、仏の世界に住し、智慧によつて心を澄ませた時、「狂言綺語」がそのまま「陀羅尼」となつていくのではないだろうか。¹²⁾

貧家に生まれながら出家し、戒律を持した無住ではあつたが、晩年は「衣鉢・道具之外、無シニ資財ノ畜^マ。」と『雑談集』に見えるように、日々苦しい生活を送つていたようである。ただそうした困窮した中にあつても、「近代ノ明匠ニ、

仏法ノ大綱聞^レ之、大果報也」として、今生において仏法に巡り会えた幸せを述懐しているのは、生涯にわたって聖財を友とした無住だからこそその真心の発露と言えよう。

注

- (1) 引用は、渡邊綱也校注『日本古典文学大系『沙石集』』(岩波書店、昭和四十一年五月)に拠る。
- (2) もとより「仏教」と「経済」との関わりについては複雑なものがああり、あらゆる分野からの検討が必要となってくる。本稿は、中世の僧侶が記した説話集からの検討という、ささやかな試みである。
- (3) 引用は、『統群書類従』第三十二輯下(雑部) 所収のものに拠る。
- (4) 『大正新脩大藏經』第十三卷所収のものに拠る。なお、この文言は、『栄花物語』『太平記』等の古典文学作品にも語られており、また宥快(一三五四〜一四一六)撰とされる『大日経疏鈔』においても「當念財物文是对治ノ相ヲ委積スル也。太賢釈云。為身求財集ム悪行ヲ。財ハ随テ命ニ捨シ悪業隨文経云。妻子珍宝及王位。臨命終時不隨著等文此等意也」と見える。ここでは「太賢釋云」として、財は命終とともに消え失せるが、自身の為の財宝に執着する悪行(悪業)は来世までも付き従って行くことが説かれている。
- (5) 引用は、『統群書類従』第三十二輯下(雑部) 所収のものに拠る。
- (6) 本史料については、これまで以下の論考を試みた。拙稿「東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』をめぐって」(『佛教学』第三十一号、平成十九年三月)、同「幼童の稽古―東京大学史料編纂所蔵『連々令稽古双紙以下之事』にみる文学書・付影印―」(『智山学報』第五十六輯、平成十九年三月)。

- (7) 引用は、山田昭全・三木紀人編『雑談集』(三弥井書店、昭和四十八年九月)に拠る。
- (8) 引用は、宮坂宥勝校注『日本古典文学大系』『仮名法語集』(岩波書店、昭和三十九年八月)所収のものに拠る。なお『妻鏡』については、渡邊信和氏によって『妻鏡』は無住道暁の著述ではないと思われるが、無住道暁に非常に近い人物、長母寺か桑名の蓮華寺における無住道暁の弟子、無住道暁と交流のあった親しい人物の著述ではないだろうか」と説かれている(渡邊信和『妻鏡』の著者についての私見―無住道暁の説話採録の方法から見た―、『東海仏教』二十五号、昭和五十五年五月)。
- (9) 例えば、和歌の詞書から「布施」の用例を抜き出せば、「手箱」「念珠」「鏡」「装束」「硯」等を見ることができ、
- ・「手箱を布施にしたりけるを」(『金葉集』六〇一)
 - ・「女郎花の枝に菩提子の念珠をかけて布施にたまはず」(『統古今集』八〇七)
 - ・「講師中納言律師たふとくしければにはかにおほきなる鏡を加布施にしけるに」(『散木奇歌集』一四一六)
 - ・「僧の布施にわらはべのさうぞくをしてまゐらするに」(『頼政集』六〇七)
 - ・「亡者の小手箱を布施にしけるに」(『明日香井集』一六二〇)
 - ・「知恩寺にて霜月六日、重衡中将法然上人へ受戒の布施の松陰と云ふ硯を見て」(『逍遊集』二六八三)
- (10) 小島孝之氏による『沙石集』の説話とその社会的背景(『新編日本古典文学全集』沙石集』小学館、平成十三年七月)において、『沙石集』の中で頻繁に取り上げられているテーマの一つに信施の問題がある。即ち、ろくに信仰心もない僧が、いかに加減な説経をして信者の布施を得るのは、有所得の説法であつて墮地獄の罪に当るといふ発言がしばしば見られるのである。と説かれている。
- (11) 無住の学問については、前掲注(1)書「解説」において、「無住の学識の中心をなすものは、宗鏡録・大智度論・摩訶止観あたりにあつたのではないかと思う。」と説かれている。無住の財に対する意識を含めて、さらに検討する必要がある。

ろう。

(12) 同様の言葉は、『沙石集』巻五「学生ノ歌好ミタル事」にも、「凡狂言綺語ニ、和歌ヲ入ル、事ハ、染歌ト云テ、愛情ニヒカレテ、ヨシナキ色ニソミ、空ノ詞ノカザル故也。聖教ノ理ヲモノベ、無常ノ心ヲモ連テ、世縁俗念ヲウスクシ、名利情執ヲモワスレ、風葉ヲミテ、世上ノアダナル事ヲシリ、雪月ヲ詠ジテ、心中ノ潔理ヲモサトラバ、仏道ニ入煉チ、法門ヲサトルタヨリナラベシ。」と見ることができる。

(13) 『沙石集』巻五「和歌ノ道フカキ理アル事」に、「和歌ノ一道ヲ思トク(ニ)、散乱鹿動ノ心ヲヤメ、寂然静閑ナル徳アリ。又言ス(ク)ナクシテ、心ヲフクメリ。惣持ノ義アルベシ。惣持ト云ハ、即陀羅尼ナリ。」と見える。

〈キーワード〉 無住、財施と法施、世財(一生の財)と聖財(萬代の財)、智恵